岐阜経済大学論集 34 巻 3 号（2000 年）

『第二の性』の歴史的射程

――フェミニズム「経済学批判」に向かって（3）――

青　柳　和　身

I. 課題意識
II. 問と方法
III. 構成とメッセージ（1）　……（以上第 34 巻第 1 号）
IV. 構成とメッセージ（2）　……（以上第 34 巻第 2 号）
同上〔つづき〕　……（以下本号）
V. 生物学的運命

IV. 構成とメッセージ（2）〔承前〕

4. 第三部「自分を正当化する女たち」および 第四部「解放に向かって」

第三部と第四部は，女の「状況」にたいする女の自律的対応として共通性があるばかりではなく，第四部の全体的内容も女の解放の「困難」（引用文⑤）性という重い「問題」（同⑥）の提起であって，単純で具体的な解放展望の提示とはなっていない。その点を考慮して両者を一括して取りあげよう。

まず第三部（原題 Justifications[63] 正当化）から各章別に重要な指摘を摘記しよう。

〔第十一章「ナルシシストの女」〕

「〔ナルシシズムとは〕，自我が究極の目標とされて，主体が自我へ逃避するという，疎外の一つの過程である。……多くの女が自分の関心を自分の自我だけに執拗に限定し，自我を〈すべて〉と混同するかたちで肥大させるのは，女が何者でもないからなのだ。……女がこのように自分を自分自身の欲望に差し出すのは，……自分が客体として見えていたからであ〔り〕，……〔思春期には〕この身体が受け身で，欲望をそそるものであることを知らされた〔からだ〕。」（㊽，II-489–490）

「〔鏡の魔術で〕女は……唯一の絶対的な女君主と〔なり，たとえ不器量な女でも〕……若い女の肉体の純然たる豊かさがあれば〔鏡の恍惚（エクスタシー）には〕十分なのだ。……自分相手に〔する〕自分の身上話〔は，ナルシシズムの別の装置であり，それが〕……自分の偶然の人生を運命に変えてしまうのである。……彼女たちが最も苦しんでいるのは一般性……つまり，無数の他の妻，母，主婦，女のなかの一人〔に飲み込まれていることである〕。……別の女たちは一貫性をもってある人物像を作り上げ，その役を根気よく演じる。……他人のうっとりとした目〔や〕……好意的な観客がいないと，彼女は聴罪司祭や医者，精神分析医……手相見や占い師に相談に行く。……〔恋愛妄想の場合〕想像上の恋人に求めているのは，自分のナルシシズムの開花である……。」（㊾，II-491–492, 494–496, 500, 505）

「〔ナルシシズムの女〕の不幸は，自己欺瞞のせいだとはいえ……無を体験することである。……彼女の虚栄心が満たされることはけっしてない。年をとればとるほど，……自己欺瞞の〔中に〕……沈み，……自分の周囲に偏執狂的妄想を築きあげる。『自らの命を救わんとする者は，それを失うであろう』という言葉がとりわけ当てはまるのが，ナルシシストの女なのである。」（㊿，II-508, 510）

〔第十二章「恋する女」〕

「『愛』という言葉は男と女とでは全く異なる意味をもつ。そして，それこそ二つの性を隔てる深刻な誤解の原因である。……〔男の場合，〕恋人は他の諸価値の中の一つの価値にすぎ〔ず，〕……女の中に自分の存在が完全に飲み込まれるのは望まないの〔にたいし〕，……女にとって，愛は主人のために〔肉体と魂を捧げ〕全面的に自己放棄することであ〔り，愛は女がもつ唯一の信仰である〕。……〔これは〕自然の法則ではない。男と女の状況の違いが，愛について男と女が作り上げる観念のなかに反映されるのだ。……〔愛によって〕彼女は自分の隷属を熱烈に求めることを選択する。それが自分の自由の表現と思えるからで〔あり〕，……自分の……客体的状況を徹底して引き受けて，それを乗り越えようとする〔からである。〕」（⑥1，II-511，512）

「〔恋する女の願望は〕最愛の人と自分を隔てる境界をなくし，自分自身を完全に解体し，……愛する人と……一体化〔すること〕である。価値の尺度，世界の真実は恋人の意識のなかにある。だから，〔家来兼奴隷として〕恋人に仕えるだけでは十分ではない。女は彼の目をとおして見ようとする。……彼女は愛する男のもう一つの姿，……分身である。彼女は彼なのだ。……愛する男の世界〔に生き〕……責任を放棄するなかでの絶対の所有〔という〕……確信が彼女に……高い喜びを与えるのである。……愛する男に必要とされているかぎりは，彼女は完全に正当化されるのである。」（⑥2，II-521，525）

「しかし，この栄光の至福が続くのは稀である。〔恋人として神格化された〕どんな男も神ではない。……〔恋人への幻滅は，親にたいする〕幻滅よりずっと残酷である。なぜなら，自分のすべてを捧げた男を選んだのは女自身であるからだ。……

最初，恋する女は恋人の欲望を満足させるのに熱中する。……彼女は奴隷になることで，彼を鎖で縛る確実な手段を見つけたのである。……ちょ

うど聖櫃のなかの神のように〔恋人を縛る〕。……彼女は〔恋人の〕牢獄の番人なのだ。……ここに恋愛の苦しい矛盾の一つがある。囚れの神がその神性を失くしてしまうからだ。……女にとって男が必要なのは，彼女が自分の自由から逃げようとするからである。」(⑬, II-526, 528–529, 531, 534)

「恋する女は恋人の世界に閉じこもるので，恋愛は友情を殺してしまう。嫉妬は彼女の孤独をいっそう激しくし，その結果，依存状態をよりきついものにする。……〔しかし恋人をつなぎとめようとする〕すべての努力は無駄である。〔彼女は〕最初に彼を引きつけた……あの〈他者〉の像をよみがえらせることはできない……。彼は愛人〔彼女〕が完全に自分のものであって，しかも自分とは異なるものであってほしい〔という二重の不可能な要求をもっているからである〕。……

……強固な絆，つまり子どもや結婚によって恋人をつなぎとめようとする……結婚願望は多くの恋愛関係につきまとっている。それは安全願望である。……〔しかし結婚による将来の保証という〕思惑買いをするとき，彼女はもはや恋する女の名に値しない。……自由な契約が一生続く非常に稀な場合を除けば，恋愛＝宗教は破局に行きつく。」(⑭, II-538–539, 541)

「本来的な恋愛は二人の自由な相互性を認めたうえで築かれなければならない。そうなれば，恋人のどちらもがお互いを自分自身として，他者として経験でき……，恋愛は自分を相手に与えることによる自己の発見であり，世界を豊かにすることであるだろう。……

〔しかし〕さしあたっては，恋愛は……女の世界に閉じ込められ……自立でき〔ず〕……手足を奪われた女に重くのしかかる矛盾の縮図である。恋愛の数知れない殉職者たちは……〔そのことを〕証言したのである。」(⑮, II-542–543, 545)

〔第十三章「神秘的信仰に生きる女」〕

「愛は最高の天職として女に与えられてきたので，……状況によって人間

の愛が禁じられたり，失望したり，要求が多かったりすると，女は本当の神を崇拝しようとする。……〔男の信仰は浄化された知的なかたちをとっているのにたいし，女の場合〕天上の婚礼への歓喜に身を委ねる女は大勢いる。しかも彼女たちは驚くほど感情的にそれを体験している。女はひざまずいて生きるのに慣れている。」（㊻，II-546）

「男と神との錯綜した混同は多くの信心深い女に見られる。……神秘主義者の女が神に捧げる感情のなかには，肉体が多少なりとも場を占めている。……〔その〕感情の吐露は地上の愛人たちが体験するそれをなぞったものなのだ。……女は神の愛のなかに……恋する女が男の愛に求めるもの，つまり，自己のナルシシズムの極致を求める。……天上全体が彼女の鏡になったときのナルシシストの心を満たす陶酔は理解できる。……彼女が抱きしめるのは彼女の分身，神の媒介によって無限に高められた彼女自身である。……

〔イエスの愛のことばを聞き〕……〔神に〕[64]選ばれた女はこんなにも熱烈でこれほどの高みから降ってきた愛の告白に，情熱をもって応えずにはいられないのだろう。彼女は恋する女の常套手段，つまり自己滅却によって，愛する人と結ばれようとする。……〔宗教上の〕[65]忘我状態（エクスタシー）はこの自我の放棄を身体的に模倣しているのだ。……この放棄の激しさによって，……輝かしい至高の〈現存〉〔神の存在〕[66]は陰画的に示される。……

忘我状態（エクスタシー）……〔の〕体験を行為を通して世間に伝える必要を感じる女もいる。……彼女は不確かな教義を伝え，すすんで宗派を起こす。」（㊼，II-548–549, 551–553, 556）

「神秘主義的な熱情〔という〕……個人的救済の……努力は……失敗に終わるしかないだろう。……いずれにしても，女は世界に働きかける手がかりをも〔たず〕，……自分の主観性から抜け出せ〔ず〕，……自由は神秘化されたままである。女の自由をほんとうに実現するやり方は一つしかない。それは，能動的な行動をとおして自分の自由を人間社会に投企（プロジェ）することで

ある。」(㊽, II-556–557)

第三部の結論は，すでに引用した㊼と引用文㊽で示されているので，各章の具体的検討は行わず，各章の引用文を概念的に総括するにとどめよう。

第三部は女の「自律的」行動のボーヴォワール的「史的唯物論」による解明とその具体化である。

引用文㊼，㊾，㊿で指摘されている「ナルシシストの女」は，自己「物神的セクシュアリティ」を最も純化したかたちで行動化した女であり，その行動の「自律性」は結局「主客的性関係」という両性のセクシュアリティ的「土台」に規定されたものである。

引用文(61)，(62)，(63)，(64)，(65)で指摘されている「恋する女」は，自己「託身的セクシュアリティ」を最も純化したかたちで行動化した女であり，その行動の「自律性」も結局「主客的性関係」という両性のセクシュアリティ的「土台」に規定されたものである。

引用文(66)，(67)，(68)で指摘されている「神秘的信仰に生きる女(原題：La mystique / The Mystic[67])」は，自己「物神的セクシュアリティ」と自己「託身的セクシュアリティ」の両者を最も純化したかたちで観念的に行動化した女であり，その行動の「自律性」は「主客的性関係」という両性のセクシュアリティ的「土台」を，「神」すなわち至高の絶対者としての「男」の観念を媒介にして転倒的に反映したものである。

いずれの女の行動も，「主体」(＝主人)としての男を通じてのみ自己の存在が「正当化」され，自己の存在「価値」が評価されるという両性関係構造が前提されている点で共通性がある。この場合，男は女の「存在」と「行動」，すなわち女の人生「時間価値」の絶対的「価値尺度」としての地位を占めている(引用文⑲参照)[68]。

第三部で注目すべき章は，量的にも質的にも比重の高い第十二章である。(61)と(62)および(63)と(64)は，㊵と㊶の解説ですでに検討したような両者(㊵と㊶)

の内的相互関連を解明している。すなわち，性的非「相互性」こそが，性的「相互」独占＝「相互的」性的排他性という形式的「相互性」関係としての結婚契約を願望する「ロマンチック・ラブ」心性の基礎であることを，豊富な事例検討を前提して総括的に指摘している。この指摘は近代の「ロマンチック・ラブ」を，両性の性的対等化指標として肯定的に評価する歴史観のイデオロギー（神話）性にたいするボーヴォワール的「史的唯物論」による批判となっている。

㊹は女の「性的託身」の実現形態としての性的独占＝性的排他性の「相互的」契約は，妻を世帯内に「閉じ込め」る手段であると同時に，夫＝世帯主にたいしても妻と子の「扶養」義務という鎖で，男を「家庭」に縛りつけ，男の職業労働を家族の「扶養」労働として義務化する契機でもあることを，「恋愛」心理の男女差の延長として解明しており，第二部第五章の前提条件の説明ともなっている。

このような性的相互束縛に女と男が固執する理由は，女にとって「安全」な性的権利の実現手段が他にないからであり，男にとって「安定」した性的権利の実現のためには，結婚にせよ，「買春」にせよ，貨幣的負担が不可欠となっているからである。このような社会的性的条件は，女の家事労働と男の職業労働の労働心性にたいし深い影響を及ぼしうる性的要因であると言えよう。

㊺はこの章の結論的指摘である。㊺の「自由な相互性」とは，㉓の「自由〔な〕……相互関係」および㊲の「相互的寛大さ」による「相互関係」と全く同内容の指摘であり，現代的「恋愛」の矛盾の豊富な事例検討を基礎とした，㉓と㊲を含めた実証的結論であると同時に，「自由な相互性」こそが両性的真理「共受」関係の基礎であることが，認識論的レベルから指摘されている[69]。

第四部（原題：Vers la liberation / Towards Liberation[70]）は一つの章と「結論」から成っているが，その重要な指摘を摘記しよう。

〔第十四章「自立した女」〕

「〔女にとって市民的自由は抽象的なものでしかなく〕，労働だけが実質的自由を女に保障してくれる。寄生的な生き方をやめたときから，……〔依存の〕システムは崩れ，女と世界のあいだに男の仲介はもはや必要でなくなる。……〔しかし女が労働〕によって自由を獲得できるのは社会主義社会においてだけであ〔り〕，……女の地位の向上によって〔労働者が搾取される〕社会構造が根本的に変化したわけではない。……〔女にとって，人生の成功は男に気に入られることであり〕，その結果，〔男の〕援助を受けるようになる。これこそ……〔雇い主に期待されていることであり〕，生活費に足りない給料しか支払われないことになる。……

〔しかし〕職業をもつことで社会的，経済的自由を見出している恵まれた女たちがかなりいる。〔したがって〕女の可能性や未来が問われるとき，……彼女たちの状況について注意深く検討することが〔必要である〕。」(㊾, II-561–563)

「〔男の場合〕人間としての使命が男としての運命を制約しない〔が，女の場合〕……女らしさを完成させるため，自分を客体〔化する〕……ことが求められる。まさにこの葛藤が，解放された女の状況をとりわけ特徴づけているのだ。……女も……性をもつ人間でなければ，完全な……人間……〔とは言えず，性的に〕女であることを捨てるのは，自らの人間性の一部を捨てることだ。……彼女〔は〕……主体であり能動的でありながら，女を受動性にとどめておこうとする世界のなかで生きなくてはならない。……最大の難問が生じるのは性の領域においてである。……自律的能動性ある人間であることと……女であることとは矛盾する〔からである〕。……〔それゆえ彼女は〕女としての劣等コンプレックスに苦しむ。……

頑張って責任ある地位に就いて，世間の抵抗に抗する闘いの激しさを知っている女は――男と同様に――幸せなアヴァンチュール〔で肉体的欲望の充足と〕……気晴らしを得たいと思う。……〔しかし〕世間は彼女に

性的偽善を要求〔する〕。……〔街で一時的性パートナーを拾うことは，女にとっての危険性（性病，妊娠，暴力）が大きい。金を払って男を道具にすることは，感情的抵抗がある。女の側からの大胆な性的誘いも，男の性心理の抵抗から失敗することが多く，成功しても男から受動的なモノにされてしまうだけである。〕」（⑩，II-564–570, 572）

「〔性的能動性は男のエロチシズムと調和しているが〕，女は受動性を拒否すれば，彼女を快感に導く〔自分の〕魅惑を壊〔し〕，……自分の優位を表現すると，女はうまく快楽に到達できない。……〔快感が得られなければもてあそばれたと感じ〕，満ち足りれば恋人をずっとつかまえておきたいと思う。……〔こうして〕女のエロチシズムの性質と自由な性生活を送るむずかしさが女を一夫一婦制へと向わせる。しかし愛人関係や結婚と職業……〔との両立は〕女にとって……〔きわめて〕困難である。恋人や夫がその両立をあきらめるよう要求することがある〔が〕，……譲歩すれば……従属の身とな〔り〕，……拒否すれば無味乾燥な孤独を余儀なくされる。……〔職業と結婚を両立させた場合でも〕女は夫が「ほんとうの女」と〔結婚した場合の〕……利益を失わせないように〔家事・育児に献身〕する。〔その結果，彼女の労働は「耐えがたいもの」（II-639）となる。〕……〔自由にコントロールできない妊娠出産によって〕，望んで産んだのではない子どもの面倒を女が引き受け，自分の職業生活を失うことになる。……このように，今日，自立した女は職業への関心と性的使命への配慮のあいだで分裂している。」（⑪，II-573–574, 577–580）

「確かなことは，これまで女の可能性はふさがれていて，それが人類にとって損失になっていたこと，そしていまこそ，女自身のために，みんなのために，女にあらゆる可能性を追求させる時である，ということだ。」（⑫，II-602）

〔結　論〕

「女は内在性に閉じこめられているから，この内在性という牢獄に男も引きとめようとする。……母，妻，愛人は〔牢獄の〕女看守である。……〔しかし〕今日では闘いは別のかたちを取りはじ〔め〕，……男を内在性の領域に引きずり込むのではなく，自分が超越性……へと浮び上がろうとしている。こうなると今度は男たちが新しい軋轢を生み出すような態度をとる。……

男女がお互いに同類だと認めあおうとしないなら，つまり，女らしさをそのまま永続させてしまうなら，こうした闘争はいつまでも終らないだろう。……こうした悪循環を断ち切るのがこんなにも難しいのは，両性ともそれぞれ自分の犠牲者でもあるし，相手の犠牲者でもあるからである。しかし，対立する両者が純粋な自由のなかで向かい合うなら，和解は楽にできるはずである。……彼〔男〕が女たちに敵意をもつのは，女たちを恐れ……，コンプレックスを清算したり，昇華したり〔するのに〕……多くの時間と労力を費やして〔いるからだ〕。……女を自由にすれば，自分も自由になれるというのに……まさにこのことが男の恐れていることなのだ。」(⑬, II-604–608)

「男女間の数え切れない葛藤は，一方が提案し，もう一方が受け入れるこの状況の結果すべてに対して，両方とも責任を負おうとしないところから来ている。……女は保証してもらった抽象的平等をよこせと要求するし，それと交換に，男は具体的な不平等を認めるよう要求するからだ。……女は自分がすべてを与えたと不平を言うし，男は，すべてを取るのは女だと抗議する。女が理解しなければならないのは，――経済学の基本法則なのだが――提供される商品の値段が，売り手でなく買い手によってつけられ，この値段によって交換が行われるということである。……〔だから交換は等価交換ではなく〕，……この不平等は二人で過ごす時間が――あたかも同じ時間であるかのように見えながら――二人にとって同じ価値を

もたないことにはっきり表われてしまう。……男は社会の正員だから，彼にとって時間は，金，名声，快楽になる積極的な富……である〔のにたいし〕，……女にとって時間はどうにかしてつぶさないといけない重荷である。……つきつめれば，彼〔男〕は愛の行為をするのに必要な時間だけ女と過ごせればいいと思っている〔のにたいし〕，……女は男がおしゃべりと外出の時間というおまけを『つけて』くれないと，体を任せたりはしない。」（⑭，II-610–611）

「男女が平等である世界を想像するのは難しくない。それはまさに，ソ連の革命が約束していたものだからだ。女たちは，男たちとまったく同じ条件で育てられ，教育を受け，そして同じ条件で，同一賃金をもらって働くだろう。慣習として性的自由は認められるだろうが，性行為はもう金になる『勤め』とは思われなくなるだろう。……結婚は，二人が望めばそのまま解消することのできる自由な契約に基づくものになるだろう。母になるのも自由に任され……〔妊娠出産休暇と手当の十分な支給および育児負担の多くの部分を共同体が負担するだろう。〕……

しかし，女と男がほんとうに同類になるためには，法律，制度，慣習，世論そしてすべての社会的背景を変えるだけで足りるだろうか。」（⑮，II-613）

「女が変わるには，その経済的条件を変えるだけですむと思ってはならない。……精神的，社会的，文化的な成果がついてこなかったら新しい女は生まれないだろう。……

〔教育において〕子どもの性への好奇心や喜びを抑制しようとしても無駄である。……最も知的で寛容な教育とは子どもが自分自身で経験するのを邪魔しない教育である。……たとえば，女の子に『不品行』の烙印を押さないだけでも，すでに進歩である。……問題にしたいのは，人間の条件につきものの偶然性や悲惨さを女からなくすことではな〔く〕，……それらを乗り越える手段を女に与えることなのだ。……

現代の女たちの多くは，人間の尊厳を欲しがりながら，相変らず自分の性生活を奴隷の伝統によって捉えようとしている。だから彼女たちには，男の下で身を横たえ，〔「心底から受け身だと感じ」(II-616)〕，男によって貫かれるのが屈辱的だと見えてしまう。こうして彼女たちは不感症におちいり，いらいらする。」(㊻，II-614–617, 616)

「〔だが〕実際，男も，女と同じように一つの肉体であり，したがって受け身の存在であり，……自分の欲望に捕らわれた不安げな獲物である。……もし二人とも，ほんものの誇りにそなわっているあの明晰な慎み深さで，自分の条件のあいまいさを生きるなら，彼らはお互いを同類だと認めあい，友情をもって性愛のドラマを生きられるだろうに。……男も女もともに時間によって蝕まれ，死につけねらわれ，どちらも同じように，相手を本質的に必要としている。男女は，それぞれの自由から，同じ栄光を引き出すことができる。もし彼らがこの栄光を味わうすべを知っているなら，……両者のあいだには友好関係が生まれるだろう。……男女のあいだには私たちには想像がつかない肉体と感情の新しい関係が生まれるだろう。」(㊼，II-617, 620)

「『人間と人間の直接的で自然で必然的な関係は，男と女の関係である』とマルクスは言った。『この関係の性格から，人間がどこまで自分を類としての存在，あるいは人間として理解したかがわかる。男と女の関係は人間と人関の関係のなかで最も自然的な関係である。だからこの関係は，人間の自然な行為がどこまで人間的になったか，あるいは人間的存在であることがどこまで人間の自然的存在になったか，どこまで人間的自然が人間の自然になったかを見せてくれる。』[71]

これ以上巧みな言い方はできないだろう。すでに在るこの世界の只中で，自由の時代を勝利させるかどうかは人間しだいである。この至高の勝利を得るためには，男と女が，その自然の分化を越えて，友好関係をはっきり肯定することが何よりも必要なのだ。」(㊽，II-621)

⑲～㉑は，職業的「自立」を獲得した少数の「恵まれた女たち」が，真の女性解放にとって「どんな困難に直面しているか」（⑤）を具体的に解明している。「自立した女」は男の媒介なしに直接的に「世界」とかかわってはいるが，この労働面での主体性＝能動性と，内面的に人格化されたセクシュアリティ，すなわち「性的客体化」，とくに性的行為における受動性というヘーゲル（「自然」観）的セクシュアリティとの矛盾こそが最大の「困難」な問題である。その困難の個人的解決努力の結果は，性的排他性関係すなわち身体的「相互」独占契約としての「一夫一婦制 monogamy」の形成に帰着し，結局「世帯主制」の再生産（再形成）による人格的支配隷属関係に陥り，家事労働と職業労働との二重負担を負わざるをえない状況になることが，具体的事例の検討を通じて解明されている[72)]。

㉒では，「自立した女」にとっても，「女の可能性はふさがれて」いると明快に結論づけられているが，そのことが同時に「人類」的「損失」でもあることが指摘され，第九章，第十章で示唆されていたメッセージが結論的に確認されている。

㉓では，両性のセクシュアリティにおける非「相互性」，㉓の表現で言えば非「同類」性認識こそが男女間の葛藤，「犠牲者」感，敵意，闘争の根源であるが，これは悪循環的構造となっており，その結果，不断に性的排他性と女性身体の男性支配＝「囲い込み」の再生産（再形成）に帰結せざるをえないことが，「結論」として最初に確認されている。なお引用文中の「女らしさ」とは，引用文①の主旨からすれば，「男らしさ」をも含むものである。

㉔では，性的支配隷属関係とその基本単位としての「世帯主制」における「時間」の経済学の着想が，萌芽的なかたちで提起されている。男女は，抽象的平等を前提しながらも，実質的にはその「存在」価値，すなわち人生「時間価値」の不等価交換を行っているが，それは両性の「存在」価値の価値尺度機能を男が，「経済」的にも学問的にも掌握しているからである（引用文①，⑲参照）。このことを具体的に示せば，男が職業的貨幣収入の第一次

的稼得の大半を独占し，価値尺度としての貨幣を独占しているだけではなく，「職業としての学問」の大半を独占し，「人間」としての「存在論的，倫理的」（⑳）価値尺度を独占的に生産していること，その裏面として女が〈他者〉として「性的客体」化し，身体「自然」の性的物神化が生じるという両性関係構造が存在していること，その結果，人生「時間価値」の不等価交換をもたらしていると言える。

⑮では，⑲とともにボーヴォワールの社会主義論と現実のソ連論が断片的なかたちで提起されている。ソ連の革命の「約束」という表現の中に，現実のソ連（1949年当時）はその「土台」からして「社会主義」ではないとする認識が含まれている[73]。なぜなら性差別の問題は，ボーヴォワール的「史的唯物論」ではまさに「土台」（「下部構造」）の問題であるからである[74]。したがってソ連の革命の歴史的実験とその失敗という歴史認識こそが，『第二の性』で「問題」提起を行う背景にある根本問題の一つであったと言える。⑮の末尾および⑯ではその根本問題として人格「形成」，とくに人間性の根源的「一部」（⑩）をなすセクシュアリティ「形成（養成）」の問題が取りあげられている。制度変革と人格「形成」には，固有のタイム・ラグを伴わざるをえないからである（⑯）。

⑯では，両性のセクシュアリティ形成（養成）の根本的変革なしには，性的「相互性」関係の全体的実現は不可能であることが，「もし」（I-614）という仮定的条件を前提しながら論じられている。しかし現実は⑬の「悪循環」が作用しており，女は⑪の職業的「自立」とセクシュアリティとの分裂に陥らざるをえないことが再確認されている。

⑰は，⑱の末尾の文を導く前提となっている。その論理の基礎は，男女とも肉体をもった生命「時間」的存在というレベルでの根源的性的「同類」性という基本的「事実」の提示であり，⑭の「時間価値」論の「本来的」視点からの再定義が行われている。しかしこの点を人々がいかにして認識できるかどうかにかんしては何も検討されず，「もし」という条件をつけられた条

件的命題の提示にとどまっている。

㊽は『第二の性』の末尾の二つのパラグラフの全文である。この文は『第二の性』全体を通じて（㉓および㊼の「集団的」「解放……努力」という肯定表現を除き），否定的意味を一切含まず，しかも無条件の肯定命題となっている。しかしもしこれが女性解放のための唯一の「出口」であるとするならば，提起されている内容はあまりに抽象的である。いったいこの文が，どうして，どのような意味で，女性解放のための具体的「出口」となりうるのであろうか。この根本的「問」を残したまま『第二の性』は終っている。

『第二の性』の構成を全体的に検討しつつ，この問題を考察しよう。

5. 全体構成

ボーヴォワールは自己の文学作品の性格に関連して次のように述べている。「小説とは一つの問題提起（プロブレマチック）です。私の人生も一種の問題提起であって，私は人々に解決〔策〕を提示すべきではなく，人々もまた私から解決策を期待すべきではありません。その点で（私にたいする），……（女性解放主義者としての）人々の期待が私には窮屈に感じられました。」[75] この指摘は『第二の性』の全体的性格にかんしても完全にあてはまる。全体構成にかんして検討すべきことは，「解決策」ではなく，「問題提起（プロブレマチック）」の意味と性格を明確に把握することである。

まず現代的性差別を多面的に描写したII巻「体験」の内容を簡単に再確認しておこう。

第一に，全体を通じて最もよく使われ，問題検討の中軸となっている表現は，女の（世帯内への）「閉じ込め」である。この「閉じ込め」とは，抽象的法的平等を前提したものであり，法的性差別を基礎とした伝統的「家父長制」とは異質の要因によって，女を，男の独占的な性的・労働的奉仕者としての「家来」にすることである。

第二に，女の「閉じ込め」の要因は，労働領域の次元から生じているのではなく，セクシュアリティ領域の次元から生じていることが描写されている。このことは職業的に「自立した女」が背負い込む性的矛盾と，その個人的解決努力から，結局，女の性的身体の男による排他的所有契約としての「一夫一婦制 monogamy」に取り込まれ，夫（世帯主）による妻の性的・労働的「奉仕」要求に屈してしまうことに端的に示されている。

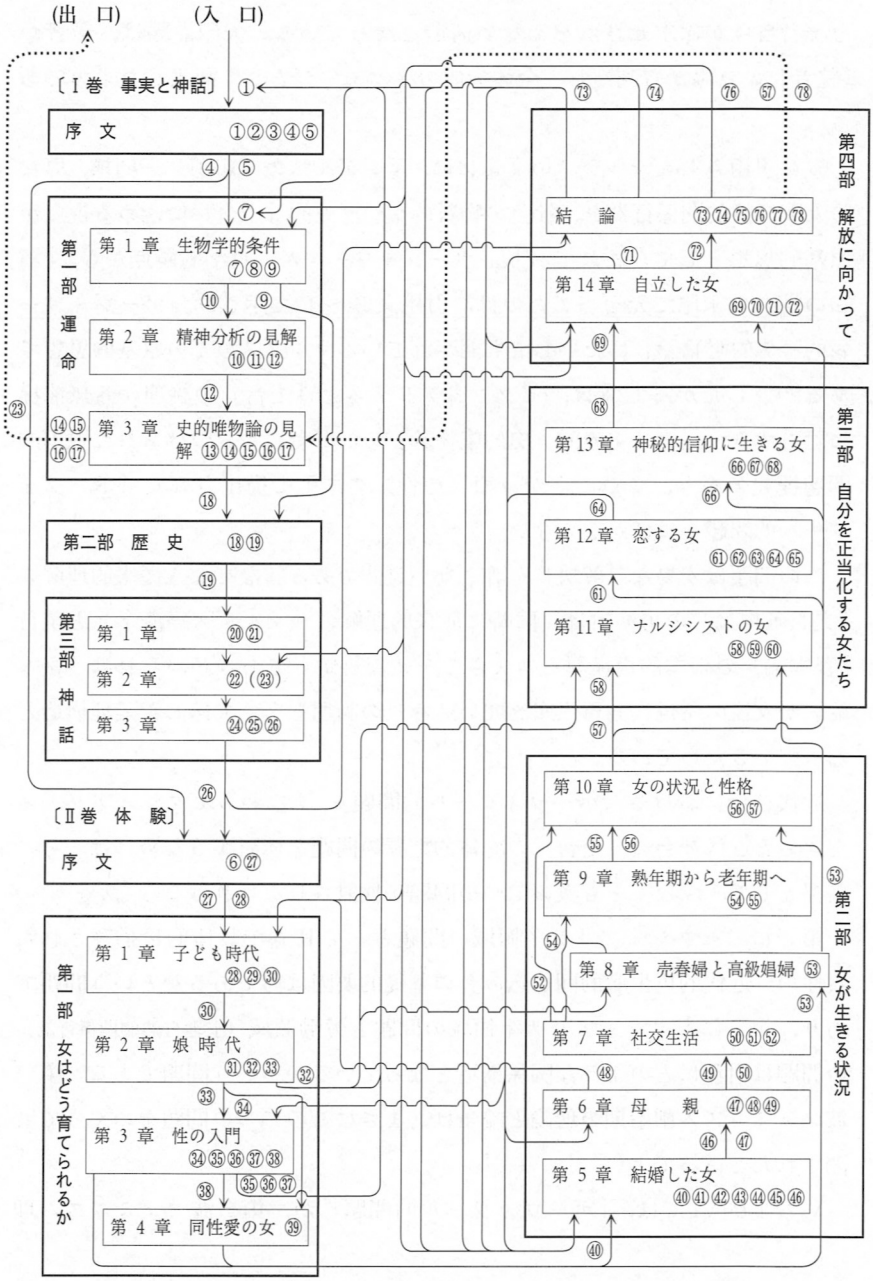
第三に，現代のセクシュアリティの独自問題は，両性が形式的には「相互性」関係でありながら，実質的には性役割が男＝能動役割，女＝受動役割として固定化され，このことが男＝性的主体，女＝性的客体としての性行動と性的心性を不断に再生産（再形成）すること，この実質的非「相互性」こそが，その補償としての形式的性的「相互」独占関係形成の基礎的条件となっていることである。これはヘーゲル的「自然」性差観に由来すると同時に，「自然」性差観を不断に再生産（再形成）するという悪循環構造となっている。

II巻「体験」で描写された以上のようなセクシュアリティ領域の特質全体を，一般的に女性の「近代的再生産的囲い込み」制度と規定し，その世帯構造（世帯主制）の内的特質を，女性の「性的託身制」と規定しよう。ここで問題となることはこの制度から脱して，女性解放へ至る「出口」はどこにあるのかという引用文④の「問」である。

この問題を明確化するため，『第二の性』全体の論理的連関を図示しよう〔図1参照〕。図の矢印線は論理連関を示し，線の脇の番号はその内容を指示した引用文番号である。

論理図の構造的特徴は，ほとんど「出口」の見当らない「スゴロク」的構造となっていることである。この構造の内部では，男性が生産した学問（I巻第一部），男性が生産した「歴史」（同第二部），男性が生産した性的言説（同第三部）を含め，全体構成は無限の悪循環的再生産（再形成）構造となっている。ただ㊽（と㉓および㊼の一部）のみが否定的内容によって閉鎖されない無条件的肯定命題であり，これを手がかりにして，『第二の性』の「出口」

図1. 全体構成論理図


(出　口)
(入　口)
〔Ⅰ巻　事実と神話〕
序　文　①②③④⑤
第一部　運命
第 1 章　生物学的条件　⑦⑧⑨
第 2 章　精神分析の見解　⑩⑪⑫
第 3 章　史的唯物論の見解　⑬⑭⑮⑯⑰
第二部　歴　史　⑱⑲
第三部　神話
第 1 章　⑳㉑
第 2 章　㉒(㉓)
第 3 章　㉔㉕㉖
〔Ⅱ巻　体　験〕
序　文　⑥㉗
第一部　女はどう育てられるか
第 1 章　子ども時代　㉘㉙㉚
第 2 章　娘 時 代　㉛㉜㉝
第 3 章　性の入門　㉞㉟㊱㊲㊳
第 4 章　同性愛の女　㊴
第二部　女が生きる状況
第 5 章　結婚した女　㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻
第 6 章　母　親　㊼㊽㊾
第 7 章　社交生活　㊿51 52
第 8 章　売春婦と高級娼婦　53
第 9 章　熟年期から老年期へ　54 55
第 10 章　女の状況と性格　56 57
第三部　自分を正当化する女たち
第 11 章　ナルシシストの女　58 59 60
第 12 章　恋する女　61 62 63 64 65
第 13 章　神秘的信仰に生きる女　66 67 68
第四部　解放に向かって
第 14 章　自立した女　69 70 71 72
結　論　73 74 75 76 77 78

を読者自身が探求せざるをえない構造となっている。矢印点線は，筆者が「読者」の立場から判断し，全体構成のメッセージとして記入したものである。

㊽に引用されたマルクスの文章には，エンゲルスの『起源』と同様，男女の人間自然的関係行為を，社会の物質的かつ歴史的「土台」に含める視点が原基的思想として含まれており，ボーヴォワールが，哲学的観点から，『第二の性』の末尾で光を当てたのは，引用文⑭～⑰で示されたボーヴォワール的「史的唯物論」にたいしても開かれているマルクスのこの原基的思想である[76]。したがって㊽は，セクシュアリティを「土台」の論理から無前提に除外するマルクス主義的「史的唯物論」の信奉者につきつけられた根本的問題提起であり，これこそが『第二の性』の末尾で提出された「ボーヴォワール的問題」にほかならない。

この問題は安易な「解決」を許さない難問である。なぜなら従来的理解の「史的唯物論」の再検討は，同時に従来的理解の「マルクス経済学」と現行『資本論』の根本的再検討を含まざるをえないからであるが，それは『資本論』が女性の「近代的再生産的囲い込み」の論理を全く欠落した論理構造となっているためである。

近代社会における「ボーヴォワール的問題」，すなわちセクシュアリティを含めた近代社会の「土台」の総体的把握の問題を検討するためには，その前提として，少なくとも次の二つの問題が検討されなければならない。

第一に，セクシュアリティ領域の問題としてII巻で具体的に描写された女性の「近代的再生産的囲い込み」の基礎的要因は何であるかという問題であり，第二にセクシュアリティ領域の問題と労働領域（土地自然的関係行為）の問題は相互にどのような関係構造となっているかという問題である。第二波フェミニズム創始期の理論と論争は，まさにこの二つの問題をめぐって展開されたと言ってよい。

VおよびVIでは，「ボーヴォワール的問題」が，第二波フェミニズム理

論の創始者達にいかに受けとめられたかという問題を中心に検討を行おう。

〔注〕

63） Beauvoir, *op. cit.*, II, p. 457; Beauvoir, *op. cit.*, ed. Parshley, p. 641.

64）〔 〕は原訳文。

65）〔 〕は原訳文。

66）〔 〕は原訳文。

67） Beauvoir, *op. cit.*, II, p. 508; Beauvoir, *op. cit.*, ed. Parshley, p. 679.

68） 第三部のタイトルはたとえば「（男の評価による）正当化」とでも訳した方がより適切であろう。

69） 性的認識論の問題は，VII で本格的に検討する。

70） Beauvoir, *op. cit.*, II, p. 519; Beauvoir, *op. cit.*, ed. Parshley, p. 689.

71）『全集』第 40 巻（『1844 年の経済学・哲学手稿』，以下『手稿』と略記），456 ページ。なおこの訳文はボーヴォワール引用訳文と若干異なる。

72） 賃労働者女性の家事労働時間は，平日 3 時間半以上，日曜 6 時間と見積もられている。『第二の性』I 巻，195 ページ。なお㊾は，男に「依存」せずに生きている「恵まれ」ない女（「最もつましい仕事についている女」）達への視線の欠如を意味するものではない。次の文を参照。「私は日雇いの女がホテルのタイル磨きをしながらこう言っているのを聞いた。『私はなに一つ人にせがんだりしたことはないよ。これまでたった一人でやってきたのさ』。彼女は自活しているという点ではロックフェラーと同じくらい誇りをもっているのだ。」（II - 561）

73） 同上，86–87，186–188 ページ，シュヴァルツァー前掲書，37–39 ページ，ジョゼ・ダイヤン前掲書，90–92 ページ参照。

74）「すべての人間に同じ扱いを要求する社会主義イデオロギーは……どんな種類の人間にも客体や偶像になることを認めない。マルクスが予告するほんとうに民主主義的な社会には〈他者〉のための場所はない。」（I - 204）

75） ジョゼ・ダイヤン前掲書，96–97 ページ。〔 〕内は原訳文，（ ）内は引用者。

76） ボーヴォワールは，マルクスのこの文章の中に，「女性共有」という特有の女性物化（＝「私的所有の整合的表現」）を前提した「粗野な共産主義」理論批判の一部としての狭い政治的意味（『手稿』，455 ページ）よりは，むしろヘーゲル哲学批判を通じた史的唯物論の原基的思想形成という『手稿』の全体的意義の一環として，深い哲学的意味を見出している。なおこの点についてのより立入った検討は VII で行う。

V. 生物学的運命

VおよびVIでは『第二の性』の問題提起が，第二波フェミニズム理論の創始者達にいかに継承されたかについて検討する。中心的な検討対象者は，「ラディカル」フェミニズムの創始者として，ケイト・ミレット（主著：前掲『性の政治学』原書1970年），シュラミス・ファイアストーン（主著：前掲『性の弁証法』原書1970年），「マルクス主義」フェミニズムの創始者として，ジュリエット・ミッチェル（主著『女性の地位 *Woman's Estate*』原書1971年）[1]，マーガレット・ベンストン（主著「女性解放の経済学」，1969年）[2]である[3]。ミレット，ファイアストーン，ミッチェルの業績にたいしては，後にボーヴォワールも注目している[4]。

これらの諸理論と「ラディカル」フェミニズムと「マルクス主義」フェミニズムの論争の検討に先立って，この論争と並行して行われた「オーガズム」論争について検討しよう。この論争は，生物学的側面をも含むものではあるが，セクシュアリティの核心的問題の一つとして，「ボーヴォワール的問題」をめぐる「ラディカル」フェミニズムと「マルクス主義」フェミニズムの理論的評価にとって最重要な論点が含まれており，また行論を先取りして言えば，この論争に含まれる生物学的運命論の批判的克服なしには，『第二の性』から継承されるべき「問題」領域そのものが成立しなくなるからである。

1. オーガズム論争と性的疎外

アン・コートは，1968年に論文「膣オーガズムの神話」[5]を発表し，オーガズム論争の口火を切った。この論文は，キンゼイ報告[6]とマスターズ報告[7]，

とくに後者を基礎として女性の性交による「オーガズム」は，性交中のクリトリスへの「間接刺激」を膣刺激と「混同」することによるか，男性にたいする性的演技としての「欺き」によるものであり，膣内にはクリトリスに相当するような快感部は全く欠如しているという「クリトリス・オーガズム唯一」論を展開した。この見解は，ミレット[8]，およびボーヴォワールの良き理解者であったアリス・シュヴァルツァー[9]（ドイツ出身），メッテ・アイルイエルセン[10]（デンマーク出身），その他多くのフェミニスト[11]に支持され，また性交中心の性愛を「強制的異性愛」として批判するフェミニズム理論の潮流をつくり出し，その中の一部に「レズビアン・フェミニズム」を形成する出発点ともなった[12]。

この「クリトリス・オーガズム唯一」論にたいし，膣内にもクリトリスと同等の快感能力があるという立場から批判を行ったのは，ジャーメン・グリア[13]（オーストラリア出身），エレン・モーガン[14]であり，またボーヴォワール自身も「クリトリス神話」という表現で手厳しい批判を行った[15]。

この国際的広がりをもった論争は，最近でも未決着のようであるが，リサ・タトル（前掲書）とマギー・ハム（前掲書）の記述から判断するかぎり，「クリトリス・オーガズム唯一」論（これをアン・コート的女性器観と呼ぼう）の方が支配的であり，クリトリスと膣内の両方に同等のオーガズム能力を認める見解は，欧米のフェミニスト内部では少数派のようである[16]。

アン・コートの主張の基礎になっているマスターズ報告は，徹底して「被験者」を客体化する「実験」観察手法によって，「性反応」を分析している。しかしこのような手法では，立証不可能な領域まで判断を拡張している部分があり，まさにこの点に非科学的判断が混入している。それは，性交時のクリトリスへの「間接刺激」と膣内快感の感覚とをすべての女性が「混同」するという仮定であり，この仮定はマスターズ的手法では立証不可能な命題である[17]。

オーガズムにかんする日本での調査報告（『モア・リポート』）には，膣内快

感部位にかんする次のような明瞭かつ具体的な記述がある。「膣の１箇所」，「膣のお腹側」，「膣の前側（上部……）」，「膣の奥」，「〔膣の〕奥の上にある，ある部分」，「〔最初の膣内快感は〕水の中の小さな魚をつかまえるようで……〔それを〕探って捕まえようという意識がな〔く〕……相手のするがままに任していたら，……〔オーガズムは〕得られなかったのでは」[18]。

女性動物学者モーガンは，これらの記述と全く同様な指摘をしている。「〔膣内壁の末端神経の欠如を根拠としたキンゼイやマスターズの主張は，膣の腹部側の皮下筋肉組織への強い刺激による膣オーガズムを見落している。男性上位の場合〕オスのまさつはワギナの腹側の表壁ではなく，背のほうの表壁にはたらきかけるばかりであった。……〔女が〕われ知らず背骨をまるめる〔わけは〕……『あなたがピストン運動の角度を是正できないのなら，私のシリンダーの角度をかえなくちゃね』ということである。」[19]

アン・コート的女性器観をもつ女性の実感と膣内快感部の存在を自覚する女性の実感にたいし，いずれも「事実」と認める方が，マスターズらの「混同」仮説の立場より，はるかに科学的な立場であろう。すなわち女性は，性交によっては全くオーガズムが得られないか，またはオーガズムがあっても膣内の快感部位を自覚的に実感できない場合と，膣内の快感部位を自覚的に実感できる場合とがあり，いずれも「事実」であると認める立場である。

解明されるべき問題は，全く異なった二つの「事実」の発生をどう説明するかである。

そこでまず第一に生物学的レベルからの仮説を設定しよう。古代から近代初期まで続いた医学としてのガレノス学派の性器観は，両性性器の同質構造観であり，女性の膣はペニスの裏返し的構造となっており，ペニスと同質の機能をもっているというものであった[20]。この認識を演繹すれば次のような仮説的命題が得られる。

〔１〕（生物学的命題）　膣の快感部（膣の亀頭）は膣奥端部腹部側にある

が，膣が十分に充血（勃起）してはじめて，この快感部（亀頭）は完全に露出され，不十分な場合露出されない[21]。

この命題は，『モア・リポート』の実感的記述やモーガンの指摘と適合的であるばかりか，アン・コート的女性器観をもつ女性の実感にも適合的である。

第二に必要となるのは両性の性行為にかんする仮説命題である。これは社会学的調査や歴史研究（人類学的研究を含む）によって立証（ないし反証）可能な命題である。

家永三郎は1985年に，日米の性交姿勢の決定的相違（日本では男子上位が84.5%を占め，米国では女子上位が37.1%で第1位，男子上位は10.6%で第4位）に言及して，性交姿勢を含んだ性の歴史研究の必要性を提言しつつ，このような「問題意識をもつ歴史家が1人でもいるであろうか」と，当時の研究状況を批判している[22]。この家永提言以来，管見の限りでは研究の進展はほとんど見られないようである。そこで家永提言の主旨と『第二の性』の核心としての性的「相互性」の概念を総合して，次のような仮説的命題を設定しよう。

〔2〕（性行為命題）　非相互性的性行為と相互性的性行為

A. 能動受動役割固定的性行為（非相互性的性行為）

（1）　性交運動

男性能動型性交運動（往復〔ピストン〕運動）の場合，男性は自由な快感追求が可能だが，女性の快感追求運動は制約され，膣内快感部への刺激は全く欠如するか，弱いものとなる。

（2）　性 行 動

（1）の場合，男性の早オーガズム化（＝性交終了）と女性の遅オーガズム化の結果，女性オーガズムの欠如した性交をもたらす傾向がある。それを回避するため，男性能動・女性受動の「前戯」が不可欠と

なり，「前戯」から性交終了まで男性能動・女性受動で一貫した性行動が型として固定化される。

(3) 性 器 観

両性の性役割の異質な性行動と性反応の結果，男性器と女性器（膣）との異質構造観が自然に生じ，女性は自由な能動的快感追求運動が不可能なため，自己の膣の内部感覚構造認識の獲得は困難化する。

B. 能動受動役割交替的性行為（相互性的性行為）

(1) 性交運動

女性能動型性交運動（女性上位型体位で男性器を膣奥端部に密着させたままの振動〔振り子〕運動）の場合，女性は自由な快感追求が可能だが，男性の快感追求運動は制約され，亀頭への刺激は相対的に弱くなる。

(2) 性 行 動

(1)を先行させた場合，女性の早オーガズム化と男性の遅オーガズム化の結果，能動役割を交替して，男性能動型性交の継続も可能となる。女性は，いったんオーガズムに達した場合，連続的な多（マルチ）オーガズム能力があるため[23]，男性能動型運動でも，男性が性交終了（＝オーガズム）に至らないかぎり，量的に無制限なオーガズムが得られる。

(3) 性 器 観

両性の役割交替的性行動を通じて，両性性器の同質的構造観が自然に生じ，女性は，自由な快感追求運動の試行により，自己の膣の内部感覚構造が認識され，その結果ガレノス的膣構造観（命題〔1〕）が獲得される。ただし両性の性器は質的には同じだが，量的オーガズム能力は女性器が上まわるという共通認識が得られる[24]。

命題Aは，マリー・ストープス『結婚愛』（1918年）[25]以来今日まで続いている支配的なセクシュアリティ（性行為様式）観[26]を命題化したものであり，とくに立証する必要はないであろう。アン・コート的女性器観は，「前戯」と

してのクリトリス愛撫を絶対化し，(3)のペニスと膣の異質観を極大化したものであり，命題Aに含まれるものである。したがってもし命題Bが立証されたとしたら，アン・コート的女性器観は引用文⑧で批判されたヘーゲル的「自然」性差観の現代版であり，「生物学的運命」論の極端化にほかならないことになる。

命題Bは，(1)と(2)にかんしては観察事例の報告がある。セクソロジー研究者押鐘篤は，終始一貫した女性上位で，女性「主導」の性交運動による10時間もの連続性交〔その間男性の射精はなし〕で，100回以上の女性のオーガズムがあったことを報告している[27]。またマスターズ報告でも，大量観察の結果，女性上位型体位が女性の早オーガズムをもたらすことが確認されている[28]。(1)，(2)の基本的内容はほぼ立証されていると言えよう。

命題Bの(3)にかんしては，このような性器観があったことは，歴史研究によってほぼ実証されている。

しかし，命題Bの(1)(2)と(3)の性器観との結びつきを直接立証する資料は，管見の限りでは見当らない。命題Bは，実践的に立証（ないし反証）可能な命題となっているので，ここでは本稿の読者が，筆者と同じく，「ロードス的」実践認識論の立場に立たれることを期待したい。筆者としては，命題Bは容易に実践的立証が可能であることを確信している[29]。

以後の行論では，命題Bの立証を前提して検討を行うことにする。その際命題Bの性器観を「相互性的性器観」または「ガレノス的性器観」と呼び，命題Aの性器観を「非相互的性器観」または「ヘーゲル的性器観」と呼ぼう。アン・コート的女性器観は後者の一部であり，その極端化である。

アン・コート的女性器観が，フェミニストの内部にさえ大きな影響力をもったし，現在ももっているという事実は，ヘーゲル的性器観が，現代人の性的心性の根源，換言すれば「女性」人格と「男性」人格の根源に，いかに深く浸透しているかを示すものである。それは現代人の性行為における性的「相互性」の欠如，すなわち「主客的性関係」と，それによる両性の性的疎

外の根深さの端的なあらわれである。

荻野前掲書（『生殖の政治学』）では，この性的疎外の今日的形態として，男女の性的能動・受動関係が，「感じさせる男」と「感じさせてもらう女」の関係となり，女のオーガズムが性的ノルマ化し，両性の性的「不安と焦り」をもたらしていることが指摘されている（249–251ページ）。このような「主客的性関係」と性的疎外関係が存続するかぎり，ヘーゲル的性器観とそれを基礎にしたヘーゲル的「自然」性差観は不断に再生産（再形成）され，またこの性器観が「主客的性関係」を再生産（再形成）する。

このような状況を前提した場合，職業的に「自立した女」が受動的セクシュアリティに足をすくわれたのと同様，「フェミニスト」がマスターズ「神話」に足をすくわれ，それを前提した「新理論」を形成したとしても，それは『第二の性』で描写された悪循環構造内部の鎖閉世界（図1）における「反定立（アンチテーゼ）」の域を出ず，悪循環自体を根底から断ち切る「総合（ジンテーゼ）」理論にはなりえない[30]。

オーガズム論争の経緯は，引用文㉘の最後の一句，「男と女が，その自然の分化を超え〔ること〕」，すなわち性的「意思疎通（コミュニケーション）」（引用文㉕）を行うことが，現代人にとっていかに困難な課題であったかということ，換言すれば純言語的手段のみによる両性の「意思疎通（コミュニケーション）」と真理「共受」が，いかに「困難」（引用文⑤）であるかということを如実に示している[31]。「相互性的性器観」と実践的な相互性的（役割交替的）性行為は，『第二の性』全体の論理必然的帰結であると同時に[32]，引用文㉘の指摘を手がかりにして現実の悪循環構造の世界を脱し，㊼でも指摘されているような，新たな学問的および実践的世界への扉を開く決定的な鍵である。

〔続く〕

〔注〕

1) Julliet Mitchell, *Woman's Estate,* Penguin Books, 1971. J. ミッチェル『女性論』佐野健治訳，合同出版，1973年。この著書の中心部分は，Mitchell, J., 'Women: the Longest Revolution', *New Left Review*, no. 40 として1966年に発表された。

2） Margaret Benston, 'The Political Economy of Women's Liberation', *Monthly Review*, vol. 21, no. 4, 1969.

3） この4名は第二波フェミニズム理論の最重要な創始者と評価されている。森田前掲書，25–26ページ，古田睦美「女性と資本主義――『マルクス主義フェミニズム』の理論的枠組」『女性学』第2巻，1995年，28，34，44–48ページ，マギー・ハム前掲書，25，112–113，197–199ページ。森田前掲書では，ミッチェルの1966年と1971年の業績は，「マルクス主義フェミニズム」には含められず，1974年の業績（*Psychoanalysis and Feminism*, Kern Associates;『精神分析と女の解放』合同出版，1977年）からそれに含められているが（25–26，34–35ページ），古田論文の分類と同様に，本稿では「マルクス主義」フェミニズムに含める。その理由は後述。

4） シュヴァルツァー前掲書，48–49ページ。

5） Anne Koedt, 'The Myth of the Varginal Orgasm', in *Radical Feminism*, Koedt, A., *et al.* (eds.), Quadrange: New York, 1973. S. ファイアストーン編著『女たちから女たちへ』合同出版，1971年所収，122–127ページ。発表の経緯とその意義についてはリサ・タトル『フェミニズム辞典』（新版），明石書店，1998年，252–253ページ。

6） アルフレッド C. キンゼイ他『人間女性における性行動』（上・下），コスモポリタン社，1954年，原書1953年，（上）278–280ページ，（下）203–210，221ページ。

7） W. H. マスターズ，V. E. ジョンソン『人間の性反応』池田書店，1980年，原書1966年，70–79ページ。

8） ミレット前掲書，217–218ページ。

9） アリス・シュヴァルツァー『性の深層』亜紀書房，1979年，原書1975年，289–291ページ。

10） Mette Eiljersen, *I Accuse!*, London, 1969.（筆者未見）

11） ボストン「女の健康の本」集団『女のからだ』合同出版，1974年，84–86ページ。

12） マギー・ハム前掲書，51，160，171–172，210–211ページ。

13） ジャーメン・グリア『去勢された女』ダイアモンド社，1976年，原書1970年，46–49ページ。なお同書46ページにはMette Eiljersenの主張の紹介がある。

14） エレン・モーガン『女の由来』二見書房，1972年，112–118ページ。

15） シュヴァルツァー前掲書（『第二の性その後』），44–45ページ。

16）「膣オーガズムの神話」の解説はあるが，ボーヴォワールのキンゼイ報告批判や「クリトリス神話」批判については全く言及されていない。

17） マスターズ前掲書，31，72–73ページ。

18) モア編集部『モア・リポート NOW』集英社，1990 年，241，339 ページ。〔 〕内は引用者。（なお同書の解説者は，注 21)の「G スポット」論の立場から膣オーガズムの解説を行っている。）

19) モーガン前掲書，112–115 ページ。〔 〕内は引用者。

20) 荻野美穂他『制度としての〈女〉』平凡社，1990 年，14–27 ページ。

21) マスターズ前掲報告（81–87，90–94 ページ）では，膣の「興奮期」から「オーガズム期」に，膣の「拡張」と膣奥端部手前の子宮頸管部の「上昇」（これは女性下位姿勢を基準化した表現であり，奥端部の「露出」の方が，より客観的表現である）が生じることが立証されているが，この「上昇」の意味については何も解明されていない。なおガレノス的膣構造観は，いわゆる「G（グレーフェンベルク）スポット」論（子宮頸管部手前の膣側面壁の快感部存在論：A. ラダス他『G スポット』講談社，1983 年，58–60 ページ）とは本質的に異なる。グレーフェンベルクにせよ，マスターズにせよ，いずれにしても，極端に相違する性言説の横行は，ガレノス的同質構造性器観の欠如と，性「神話」から解放された女性自身による自由な自主的身体感覚探求とそれにもとづく自由な性表現の欠如という現代社会の特異な状況を反映している。なおこの特異性の具体的内容については注 29)参照。

22) 家永三郎「日本女性史とのめぐりあい」『歴史学研究』第 542 号，1985 年，47 ページ。この提言の依拠資料は次の通り。

表 1. 性交姿勢の状況

日本人		アメリカ人	
性交姿勢	割合	性交姿勢	割合
	%		%
男子上位	84.5	女子上位	37.1
女子上位	1.0	横臥位	27.1
横臥位	4.8	背後位	12.5
座位	0.2	座位	8.0
背後位	1.0	立位	4.7
混合位	8.5	男子上位	10.6

出所） 篠崎信男「性問題に対する生物学的発言」『人間の科学』1964 年，5 月号，62 ページ。

23) 女性の多（マルチ）オーガズム能力はマスターズ報告でも認められている（前掲報告，29–30 ページ）。なお膣は，（多）オーガズムの際にはその収縮により，ペニスへ強い性的刺激を与える能力（＝男性オーガズム促進力）をもっている（同，86–87 ページ参照）。

24) これは近代初期まで存在した両性の性器観であった。L. ストーン『家族・性・

結婚の社会史』勁草書房，1991年，413–414ページ，アンガス・マクラレン『性の儀礼』人文書院，1989年，40–45，51–56ページ。

25） M.C.ストープス『女体の結婚生理』河出書房新社，1958年所収。

26） 荻野前掲書（『生殖の政治学』），226–251ページ。なお前掲表1の米国の場合でも，性交運動様式としては男性能動型が支配的であると推定される。

27） 性交運動の途中休憩を考慮すると平均6分未満の連続的早オーガズムを意味する。押鐘篤『医師の性医学』学建書院，1977年，913–914ページ，同「いやいやのセックスは疲れる」『ミドルエイジの知的性生活』主婦の友社，1980年，47–48ページ。

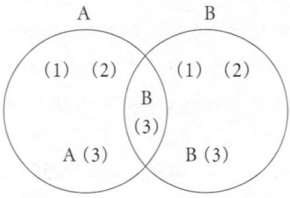
28） マスターズ前掲報告，73ページ。またマスターズ報告では「性不全」の「治療」法としても，女性の性的能動性（女性上位型等）が有効であることを認めている（同『人間の性不全』池田書店，1980年，原書1970年，89–91，106–114，272–278ページ）。その意味で同報告は問題の核心に接近したにもかかわらず，クリトリス（間接）刺激効果（＝女性の感覚的「混同」）という非実験的（主観的）解釈論に終止している。

マスターズの研究には，女性心理学者ジョンソンが「共同」研究者（reserch associate）として参加したが，彼女は女性上位型体位のオーガズム促進効果についての自主的検討や，マスターベーション用具としての人工ペニスの長期歴史的「存在」理由についての自主的検討を行わず，マスターズ（reserch director）の「客体」主義的実験手法とその「解釈」論に全面的に同調した。したがってマスターズ報告は，女性を徹底的に客体化した上での男性的「解釈」論の域を超えるものにはなりえなかった（注29）参照）。

29） 命題Bの実践的立証に不可欠な条件は，第一に，女性が自己の快感追求に適合的姿勢（めやすとしては男性の上体にたいして自己の上体の直交）と適合的運動様式を自主的に発見すること，第二に，男性がペニスの勃起維持のための適度な受動的同調運動に習熟すること，第三に，「前戯」を含めた性交渉全体において性的コミュニケーション（行為と性表現）の「相互性」関係，すなわち「二人の協力」（引用文㉒）関係をつくること（これは女性の自由な自主的快感追求運動のための両性の心理的必要条件である），第四に，男性能動型運動の場合，めやすとしては女性と男性の腰部を直交させるような姿勢をとることである（これは女性の快感追求のための自主的調整の保障条件である）。また命題Bの自主的検証は人工ペニスによっても可能である。マスターズ報告では，このような女性の自主的検証手続きを踏まえることなく，男性による推定として，女性器感覚にかんする独自な「結論」が導かれている（『人間の性反応』，72–73ページ）。またアン・コートなどの女性「フェミニスト」が，自己の身体感覚についての自主的検証を行うことなく，男性

が推定した女性器感覚にかんする「結論」にたいし無批判に同調している。マスターズの態度にせよ，アン・コートの態度にせよ，これらの態度は，現代の両性関係の特異性を何よりも雄弁に示している。筆者としては命題Bの自主的検証のための社会調査を提唱したい。

30) 『第二の性』II，第十四章（「自立した女」）の中でも，「不公平な社会を告発した叛乱者たち」を含む女性の文学作品について同様な限界が指摘されている（594–601ページ）。また引用文㊻では精神的自立要求の強い女性が，受動的性行為との矛盾感によって，「不感症」に陥りがちなことが指摘されている。

31) ㉙a参照（56〔通算〕ページ）。

32) このことは，ボーヴォワールの個人的性生活が，命題Bのようであったか否かという問題とは別次元の問題である。なぜなら命題B（(1)(2)）の場合にはB(3)の性器観の獲得は確実であるが，『モア・リポート』の記述やモーガンの指摘のように，命題A（(1)(2)）の場合でも，B(3)の性器観の獲得が全く不可能化するわけではないからである。命題A，Bの論理的関係は次の図の通りである。